

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 若林恵

本論文「国民国家形成を目指す外山正一（1848-1900）の教育改革と対外認識」は、東京帝国大学の文科大学長・総長や文部大臣などを歴任した外山正一について、その思想面を中心に、再構成を試みた研究である。論文は、序文と終章のほか、5つの章からなる。

序文では、必ずしも多いとは言えない外山正一に関する先行研究を、（1）生前の外山正一に接した人物による伝記とそれへの修正、（2）明治期における社会学の受容史のなかで外山を位置づけたもの、（3）教育史、とりわけ大学史との関わりで論じたもの、とに区分した上で、しかしこれらはいずれも、外山に対する断片的な理解にとどまっていると批判する。そして外山の対外認識をはじめ本格的に分析するとともに、その他のテキストについても、外山に特徴的な逆説的思考に留意しつつ解説し、それらを総合することで、外山の思想とその変化を明らかにしていくと、本論文での課題を明示する。

「人物紹介」と題された第1章は、外山の生涯をほぼ時系列に沿って概観することで、次章以下でのより詳細な考察への導入とする。外山の前半生に関しては、アメリカのミシガン大学への留学が外山に与えた影響に注意を促す。ついで留学から帰国し、東京大学に職を得た外山については、大学をドイツ国家学に則った政府直属の官僚養成機関と捉える明治政府主流に対して、文部省による大学への過度な干渉を有害と見做し、薩長藩閥の増長に懸念を示したとする。さらに外山の対外認識に話題を転じ、それが日清戦争を機に大きく変化することを述べ、独自の論点への布石とする。

第2章「西洋文明の受容と逆利用」では、外山のキリスト教についての考えの変化を見る。アメリカ留学時代の外山は、キリスト教と帝国主義との密接な関係を強調する論説を記すなど、キリスト教を敵視していた。しかし欧米の文明がすぐれていることは認めており、日本の文明化のためにはキリスト教を利用することも厭わなかった。帰国した外山は、英語教育を奨励し、日本人が、欧米の言語や文化を自己のものにする必要を中流以上の人びとに訴え、それを実現するために、宣教師の力を最大限利用した。1888年に外山らが設立し、良き学士の妻となるべき女性への教育を目指した東京女学館においても、その点は同様であった。

第3章の「政治制度の改良」では、主として民権運動をめぐる外山の考えについて、『民権弁惑』（1880年）、およびそれとほぼ同時期に書かれた「政府職権の範囲」を軸に、考察を加える。外山は、民権運動に対する政府の厳しい対応が、かえって運動の激化を招いていると指摘する一方で、過激な民権運動には異を唱えた。すなわち自らを政府と民権家のあいだに位置づけながら、イギリス流の議会政治を肯定するなど、大隈重信や福沢諭吉らと比較的近い立場にあった。また政府の権限を拡大することには慎重な「任他主義(laissez faire)」の考えを持っており、明治14年政変のあとも、積極的に教育改革に関する意見書を文部省に提出することで、大学という組織の内部から、教育の中央集権化の防止や学問の独立に尽力した。

その教育意見書の内容を詳しく検討するのが、第4章「地方教育振興と学制改革」である。外山の教育改革論で注目すべきは、大学の位置づけとそこへの経路である。帝国大学のレベルを下げることで、大学への接続を容易にしようとする案に対し、外山は、大学のレベルを維持しつつ、帝国大学に進学する人びとの裾野は少しでも広い方が望ましいとして、地方における高等中学校の存続を一貫して主張した。また大学内では教員養成プログラムを開き、学外でも教員検定試験の運営に従事するなど、中等教育の水準を高めるための努力も行った。文部大臣の在職期間は短かったが、大臣の権限を制約する方向で、高等教育委員会の改革を実施している。

第5章の「逆説的思考にみる「小国主義」」は、従来ほとんど分析されてこなかった『社会結合 三大一統 露西亜の大恩』（1889年）について、日本の東アジア政策と関連させながら解説していく。外山は、ナポレオン戦争が西洋各地で諸民族の団結を促したことに触れ、現在では、ロシアの侵略主義がそうした団結を促しており、いずれは「万国同盟の共和政治」が来ると予想する。国際政治に関するこうした認識をもとに、外山は、東アジアの覇権を争うイギリスとロシアの前で日清が対立するよりも、日本は、イギリスと提携しながら、清と協調し、朝鮮の「独立」を求めずともよいとし、朝鮮国内のいわゆる「事大党」の立場に理解を示すなど、現実主義的な「小国主義」とも言い得る同時代的には珍しい見解を保持していたとする。

以上の各章を踏まえ、終章では、外山の目指したものを、学士が教師・官吏・社員など様々な職業に就き、シヴィル・ソサエティの担い手として活躍する社会、そして、男女・貧富・老若間の優劣がない、思いやりによる自発的団結にもとづく国民国家の形成であったと、結論づける。

本論文について、審査委員会では、これまで本格的な研究の存在しなかった外山正一について、公刊史料はもとより、議会での発言や「外山正一史料」（東京大学総合図書館所蔵）に含まれる草稿類なども利用しながら、その思想面を中心に、はじめて明確な像を提示したものであると、高く評価された。なかでも、1）従来ほぼ無視されてきた外山の対外認識を正面からとりあげ、その特徴的な主張を再構成した点、2）まとまった形で考えを示すことがほとんどなく、しかも個々の論説や発言では皮肉や諧謔に満ちた表現を好んだ外山について、それらを逆説的思考と捉え、外山による他のテキストや同時代のコンテキストを丁寧に確認することで、読み解いていった点、そして3）そこから浮かび上がる外山の考えを、英文タイトルにある“an inclusive Nation-State”とまとめ上げた点は、本論文の特筆すべき成果であるとされた。

このように優れた本論文ではあるが、一方でいくつか問題点も指摘された。先行研究の把握に若干の問題が散見されること、対外認識についてはさらに踏み込んだ位置づけが望まれること、同時代の人物との関係への言及が薄いこと、とくに晩年についてやや性急な評価が見られること、終章での結論が必ずしも明快とは言い難いこと、国内についての構想と対外認識との連関について、もう少し言及があっても良かったこと、などである。

しかしながら、これらは本論文の学術的価値を損なうものではなく、今後の課題とすべきものであるとの認識で、審査委員会は一致した。

したがって本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。